



TITLE:

西[遊]夢録(四)

AUTHOR(S):

瀧川, 規一

CITATION:

瀧川, 規一. 西[遊]夢録(四). 地球 1928, 9(1): 62-69

ISSUE DATE:

1928-01-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183377>

RIGHT:

西遊夢錄

(V) 蘇國巡遊

瀧川規一

(一) 舟行の決心

倫敦に永く滞在する人々に蘇國巡りの道順を訊くと大同小異の答を得る。「東海岸の鐵道線路によるか若くは直通線路によつてエチンバラ市に到り、蘇國高地の湖沼の一二を見てグラスゴ市に出で、西の海岸線を通つて倫敦に歸る」と云ふのがそれである。この巡路が普通旅客の道程であるらしい。人もすなる旅に吾立ち出でにけりでは面白くない、人のすなる旅もせざりけりでは甲斐なきである。それやこれやを思ひ煩つた後に、寧ろ倫敦からアバーデーンに舟行するに若かずと考へた。吾が計畫を聞いた友人は諫止的な忠告をして呉れた。「永年倫敦にて營業に従事して居るが、邦人にして北海を舟行したことを聞かない。獨り旅ではお定りの通りに虐待されるに相異なる。不快と感ずる時には汽車なら途中からでも行程を變へることが出来る。船は乗つたが最後、目的地に着くまで不快を忍んでゐなくてはならない。殊に倫敦から東海岸を英島の北端近くまで行く海路は難航路であると聞いてゐるその航路をとつた人で平穩な航海をして來たと云ふ人は稀である、船に酔つた時他に同胞が居らぬと來たら、それこそ慘じ目である」と恐ろしいことを聞かされる。蘇國出身の倫敦の友人に意見を徵する。言簡にして含蓄深い「船に強けれ

は試みてよからう。酔ひさうになればウイスキーでも飲む。酒に酔つて拂つて暴れぬ限りは殺るしもせぬ」と云ふのである。不吉なことを聞くもの哉と一旦は想ひ止つて見たが、思ひ直せば吾既に道涯無縁の身である。今更に驚く可からずと牛若もどきに、つむじが曲り出す。人の恐ろしいと噂する航行を試みることも一生の語の種にもならうかとて艦舟行に決した。倫敦の舊市(シチー)の廣町(アロード・ストリート)にあるアバーデーン行の船會社代理店にて切符を求めるために行く。「お前は支那人か？」と店員がきく。ジャバニーズだと返答する。「ジャップだな？」と駄目を押される。船客簿に姓名を書かされる。國籍を書かされる。餘りよい感じのせめながら船賃を拂ひ船室が決まる。東道の言葉が船會社の店先で、ジャバニーズをジャップと云ひ直す必要がどこにあるかとの押問答であるかと思ふと、三日間の海上生活が想ひ遣られるやうな氣もしたが、もう斯うなつては行く處まで行かざるを得なくなつた。ジャップの押し問答位であとは無難な航海ですめばよいがと心秘かに祈つた。

下宿の女將に蘇國旅行のことを告げ、暫く部屋の明け渡しを宣告する。女將は云ふ「船賃は汽車賃よりは安い、決して安がりではない。それに船酔ひでもしやうなら大變だ。蘇國人は表面は親切で丁寧らしく見えるが、眞底は人が悪い

から注意せよ」と女將にしては柄にない親切口を刺さ、「うちのウキニイも明日から一週間休暇に出かける、ウキニイも、ウキニイも」と女將は娘の名を繰り返す。夏季になると英人は店員も主人も夫々思ひ／＼の處に旅行に出掛ける。旅先で相手の社會上の位置を知らんとするとき、英人同志は先方が幾日何週間位旅行するかとお定りのやうに聞き合ふ。旅行期間の長短によつてその人がどれ位の位置に居るか略想像がつく。上級の店員は大抵一週間位の休暇を貰ふ。三週間位になると支店長位の位置でないと出来ない。今宿の女將が娘のウキニイは一週間行くと云つたのは娘が女事務員として下級ではないと云ふことな自慢する積りであつたのである。旅のうちの旅に出かける旅鳥の吾と、下宿の娘の名を茲に連署したからとて、氣早に惡く連想してはいけない。

(二) 同じ名のウキニイ

ウキニイの名によつて連想すべき有名な一生忘れられぬ同名の女性が居る。それは永久に生きて居る。女性である。つひ數年前まで生きて居たウオツ・ダントン(Watts-Dunton)の名著エイルウキン(Ailwin)と題する美しきウエルス地方を背景にした物語の女主人公である。その可憐な娘の名がウキニイである。蘇格蘭、愛蘭、及びウエルスの三地方は夫人種風俗言語を異にして、各特有の古代文學を有し、英吉利斯文學には種々の材料と刺戟とな與へて居るのである。ウオツ・ダントンのウエルスの物語を讀んで、ローマンチックな氣分に富んだ、可憐な、若々しくはしいだ娘のウキニイ。許されぬ戀の爲めに氣が狂つて、ウエルスの山岳

豁谷の間を駆けつり廻つたウキニイのことを忘れる人はあるまい。物語中にある山岳豁谷を踏破する愛識者會が出来て居る程である。その娘らしいはしやぎやう、ウエルスの俗語を歌ふ美しい聲、そのいぢらしい姿と美貌とを胸のうちに連想して蘇國の旅の歸途には必ずウエルスをも一巡せんものと思つて居た矢先に「うちのウキニイも旅に出る」の一語で空想の夢は忽に現實に歸る今生きて物云ふウキニイは平素無口で、つんとすまし込んで居る乳母櫻の女性である。商店にあつて幾人かの部下を監督してゐる。年齢三十に近き物云はすの娘ではあるが、一度紅唇を開けば寸語も空しくしない。語調の鋭きこと剃刀の如く、體軀の瘦せたること枯木の如しである。この娘ありこの母ありで、母子が何かにつけて日常云ひ争ふ時の口の鋭さは正に剃刀と剃刀との刃合せである。小さい火花と、こぼれ刃とは傍にて日常聞かされる異邦人の心を寒からしめたことが幾度あつたか。乳母櫻たる原因を今更問ふも野暮なり、男の寄りつき得ない程の鋭さを口にもつ女性である。ウオツ・ダントンのローマンス中のウキニイとは同じ名のウキニイではあるが、對照的に連想を起さしめるに似する。云ふまでもないが、對照的連想と並べて云ふべきは相似の連想である。極東の港からマルセイユまで四十幾日の永がの船路の憂さ晴らしでもあらうが、父親から倫敦の婿殿に引渡すべく委託された大事の嫁殿の顔に見惚れて「故郷の妻の若い時の顔に似て居る」と云つては傍を離れ難てにしてゐる鼻下長が居て、監視役の心におぞましく思はしめたが如きは相似的連想である。同じく連想と云へども行方

を異にしてある。

(三) 甲板上の質問

テムズの河の左岸ウエストミンスター(Westminster)の波止場からアバーザン行きの本船に送り込まれるべく、イック・ダイエン Ich Dien)と號する端艇に乗る。獨乙嫌ひの倫敦市中に獨乙語の船名があるのは不審である。その不審は直に解けた。グキトリア女皇が獨乙皇室の血統をついで居られるから、其時代に附けられた名である。テムズ河上に架つてある幾多の橋の下を端艇は潜る。繪葉書によくある Tower-Bridge の開閉橋が大船通過の爲に引き上げられる實況を下近くで見ることゝ出來た。船會社倫敦本店前で乗客は端艇から本船に飛び移る。この時乗客は文字通りに飛び移つた。男も女も若きは機械體操の練習そつくりには凄じい勢で飛び乗る。自重する吾輩と老人とが、掛け渡しの板の上に船員に手をとられて乗船する。

夫々等級に應じて所定の船室に手荷物と投げ込んだ乗客は甲板上に竹んで、空模様を眺め込んで居る。あまり香ばしくない空模様である。先輩の忠告の言葉が實現せればよいがと氣遣はれる。吾輩も他の人々がするやうに空を眺めて居る。多くの乗客中唯一の有名人である。やがて同船客の注意の焦點となり初める。覺悟の前である。チンクとかジャップとかの言葉位ではもう僻易せぬ程に心の鍛へが出来て居る。三々五々甲板上に集つては、あれは支那人か日本人かの評議が乗客間に始まり出した。低語ではあるが耳に觸る。そのうちにも益々彼等の聲が途切れ／＼ではあるが明白に聞える一團が

あつた。些か嫌な氣持ちである。名乗つて出る譯にも行かす聞くまいと耳を塞いで居る譯にもならず、相變らず空を眺めて居る。その一團の一人が最も勇敢な人と見えて近寄つて話しかけて來た。無言の旅程憂いものはない。惡意であらうと善意であらうと話しかける相手が出來ると旅の憂さが晴れる。さうして今は只拙な英語でも喋りまくるより他は仕方がなくなつて居る。

老人は最初の程は相手を尊敬してゐるのか蔑視してゐるのか判斷のつき兼ねるやうな口の利き方をする。

一人を相手に何か喋つて居ると必ず二三人の人々が集つて來る全く縁日商人が大道演説者のやうだ。やがては多數の人々にとりまかれる。

前の勇敢なる老人は年齢七十歳を超してゐるらしく、どつぷり肥つて、半白の髪を頭に戴いて居る。服裝はあまりに無造作な服裝で、寧ろ粗服に近い方である。鼻眼鏡越しに口を利く。

「お前は孔子の下した知識の定義を知つてゐるか」とは老人の質問の第一矢であつた。

知らぬと明確に答へる正直さもこの場合額面通の價格にうけとつて貰へない。生徒の質問にあつた時、明確に記憶して居らぬ教師は生徒をして自問自答せしめる位の骨を呑み込んで居る。

「孔子は時と場合とに應じて度々適當な定義を下してゐるが、お前の所謂定義はどんなことを指すのか？」と反問を試みた老人は得意になつて「己の知らざることを知るのが知である」と答へた。それなら教育ある程のものは何人も知つて居

る處であつて、別に珍らしいことでもない」とこちらから減らす口を利く。

老人は矢繼ぎ早に拉典語、

Ille mors gravis incubat, Qui notus nimis omnibus, Ignarus moritur sibi. (His is an evil end, who dies known too well to all men, but without knowledge of himself)と口誦してこの意味を知つて居るか?と問うて來た。先方も無本の口誦みである。案外精確でないかも知れない。さう腹では決めて居るものの少々面喰つた。然し妙なことが縁になつて少々調べたことが幾年かの後にこんな處で役立つとは妙である。むかし二三夏、東山の永觀堂で朝粥の接待を受けて陽明の傳習錄の講義を聴講してストイック學派との比較をする積りで讀んだことを想ひ出した。

「それはセネカの有名な句ではないか?」

とお答へに及ぶと、老人は

「それではこの佛蘭西語を知つてゐるかい?」

と流暢に佛語を喋り出した。老人はまる暗記してゐたと見えて「モンテーン曰く」の處まで舌を滑らした。この機逸せず「知らぬでもない、それはモンテーン曰くだらう」と云ふと「さうだ、お前は何んでも知つてゐる」とお世辭を云ふ。もうそろ／＼質問の矢玉も盡きさうなものだと思つて居ると、こんどは英本國のことを問ひ始める。

英國内の一州のランカシャの訛の一句を云つて「この方言はどこか知つてゐるか」と問ふた「それならリイヤレス(無電)で先日各地の訛を放送して皆を笑はしたぢやないか、僕

も聞いてゐた」と一矢を報ゐると、急にポケットからロバ・ロイ(Rob Roy)と題する小説本を出してその作者の誰なるかを質した。

「サ・ウオーター・スコットの盜棒小説ぢやないか、蘇格蘭のロビン・フッド(Robin Hood)だ」と答へると、その本を速しくポケットに納めて「それではジョysonnを知つて居るか?」とどこまで質問を止めない。

「ジョysonnなら二人(Dan Jonson; Samuel Johnson)ある、どちらのジョysonnか?」と問ひ返へすと「勿論ジョyson博士のことだと答へる。知つてゐる」と云ひも敢へず老人は「それならどんな作品があるか云つて見よ」と宛も口頭試験そのまゝのやうなことを云ふ。知つてゐる丈けのことを答へ、心のうちでは英文學上の質問なら手前の方が假檻だと云はんばかりの氣持になつて來る。さうすると話頭を轉じて老人は「お前は一體何者だ」と肉薄して來た。「一介の書生だ」とあつさり片付けると老人は愈本題の論旨に切り込んで來た。

「お前の國の試験法は七日七夜さ引き續いて凡ゆることを聞くさうだれ、東洋に居る俺の友人がさう云つてゐたよ」と老人は一人合點のやうな云ひ振りをする。

「試験を主觀的に受験者が考へるならばさうも思ふであらうが。七日七夜さは誇張も甚しい」と反駁する。老人は自説を固持して動ぜず。

「お前の國の試験法は受験者にとつて命懸けの仕事だと俺の友人が云つてゐた。お前の意見は嘘か若くは餘りに謙抑な言ひ方だ。」

さう云ふかと思ふと、忽ち老人は吾が傍を去つて、甲板の向

ふに也してある先刻の一團に加つた。

「あの人は日本人だとの話だつたから、最初さうかと思つて見たが、俺の知る處では矢張り支那人だ第一孔子のことを知つて居る。六つかしい試験法にパスしたと見えて何を聞いても知つて居る。ネ俺が云ふが、あれはきつと支那人だ」と老人がなす宣言がよく聞える。老人の耳が聳いてゐて、吾輩と質問戦に入つてゐる最中も常に高聲であつて、つひ釣り込まれて自分も高聲になつてゐた。老人自身にとつては低聲で云つてゐる積りであらうが、聲が高い。一團の連中は無言で互に顔と顔を見合せてゐる。やがて一婦人が挨拶の返答をする。これも女の甲聲で聲が高い。

「妾も最初日本人だと思つたが、よくお喋りする處を見ると支那人らしい」と合點をうつ。

老人は吾輩の國民性を試験する密偵である。淺ましくも饒舌の結果國民性を誤られたのであつた。翌日甲板上で老人に出會つて「名刺を呉れ」と依頼したが「俺は一生旅に日を送るもので名もないものだ」と至極謙遜な態度である。

「お前の支那に居る友人の名なりと知らして呉れ」と云ふと「否否」と叫んで、さつさと向ふに行く。奇怪な老人は果して何者であつたか？ 吾には永久にとけぬ謎である。

船室の食堂ではその晩は日本人支那人と云ふ言葉が、切れ／＼に聞える。何れも夫々の好奇心を満足さすべく質疑應答にそがはしく見えた。

(四) 愉快な交談

第二日目のことである。薄茶色の洋服を着た背のすらりと

高い肉付きのよい引緊つた顔をした五十の坂を幾つか越したと見える男盛りの一紳士が接近して來た。銀行員か會社員で上級の人であるらしく、この紳士は日本人か支那人かと云ふやうな愚問を發しない。

「俺の銀行に日本の學生が時々來てバンキング・システムを研究に來る。最近も二人來てゐる。お前の専門は何か？ 暇があれば遊びに來い」と親切に云つて呉れる。お世辭半分でも斯うした場合には嬉しい。

「お前は新聞に書いたり本國政府に報告したりすることがあるか？ お前は米國をどう考へて居るか？」と要領を得た質問を紳士はする。

「喧しく大袈裟に取沙汰するのは日本よりも米國人である。日本人は決して米國を憎んでゐない」

とあたり觸りのない返事をする、紳士は

「それは個人としての感じであらうが、ネーションとして米國を日本はどう考へて居るか？ 俺は聞いて居るのだ」と切り込んで來る。一國の政治家としてなら決して本音を吐かない政治家ならぬ自分が愚なことを云つて後で取沙汰されるのもおこがましいと思つて返答に躊躇してゐると、紳士は「それでは教へてやらう」と云はんばかりに、

「日本の強くなることを米國が欲しないのだ。口實のある毎に日本の頭を叩くことを米國では考へて居るのだ。それはさうとして日本の人口問題はどう片付いたか？」

とは紳士の話題であつた。「歴代の内閣が未だに具體的な永久的解決を得てゐない」と云ふと、紳士は「滿洲へ手を延ばせばよいのだ。然し米國は干渉するだらう。結局支那同様な程

度に日本が止まつて呉れれば米國には好都合なのだから」と教へて呉れる。

四五人の大學生らしいのが取り巻いて来る。紳士の話題を受け繼いで、學生らしく正直に「俺は米國が大好きだ、若々しくて元氣があるから」と云ふものもあれば「米國は嫌ひだ」と云ふものもある。第三番目の學生は云ふ。「俺が米國人の口から親しく聞いた處では米國は何と来て出る釘の日本頭をうち込もうと考へて居るのだ。倫敦へ来て公私の會でそんなことを提言的に公言することを度々聞いた」

六つかしい政治外交策や街學的な論議に時間を過ぐすと肩が贅る。多くの乗客中には種々異つた角度に於て日本と利害關係を有するものが居らう。濠洲歸りの一蘇國人らしいのは他の一團の中心となつて彼が濠洲に於て農業經營をやつて居た經驗談から頻りに排目的氣焰をあげて居た。そんなこんな六つかしい乗客は扱て措いて只一人話相手として氣の掛けぬこれも亦五十歳前後の小柄の乗客が居た。

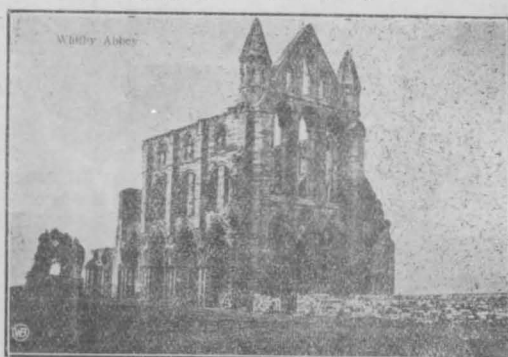
長いテムズの河を下り行く間に兩岸の建物や緑の芝生或は此處彼處に見える叢林を眺めて居ると、聳え立つ建築物や、大船通過毎に吊り上げられる開閉橋の構造を説明して呉れたり、あればグリーンニツチ天文臺であるとか、あそこに見えるのは海軍の船渠であるとか懇切にコクニー訛りで教へて呉れる私は實業家でもなければ金持ちでもない。勞働の身であるが、今日では相應の待遇を受けて居るので満足して居る。お前に先刻から話しかけて居た人達のやうに教育は受けて居ら

ぬから六つかしいことは知らぬ。その上に小兒の時から頭が悪いので何にも知らぬ。今日まで獨身生活を續けて来て、日々の生活に何の不足も不満も感じて居ない。今の身分で満足してゐる。一人の甥が居つて、私の會社に勤めて居る。寫眞を見てやつて呉れ。今年十七歳になる。毎晩夜學校に通はしてゐるから、私よりもよく知つてゐる。速記も出来れば簿記も出来る。ビズネスに關することは何でも出来る」

と喋る言葉は純倫敦訛のコクニーで、パイパを云ふ可き處をパイバと云ひ、エヂエケイションと發音すべき處をヘヂエカイションとやるので、最初の程は中々聞き取れなかつたが半日經たぬうちにいつの程か自分も其眞似をして發音し出すと「お前の發音の方がよいのだから、無學の私の眞似をしなさんな、私は小供の時から言葉だから直らない」と親が小供に教へるやうに云つて呉れる。差し出した寫眞を見ると、眉目清秀の美少年である。

「新聞に屢發表される富豪や實業家の遺産價格を見るとそれが法外に莫大なのに驚く。贅澤三昧に一生を送つて猶費ひ切れぬ人があり、また一方には一生汗水垂らして働いても猶生活に苦んで居る人が居る。普通の勞働者は實に可哀相だ。政府は富豪の子弟にもペンション・システムを設け、生活に必要なものは與へるが、その他のものは社會的事業の爲めに費すと云ふ風にやれば不平も起るまいに。私は勞働者の云ふ主張には相當に賛成しても無法なことには賛成せぬ。共產主義も無政府主義も結局は人も我も滅亡するに過ぎぬから反對で

ウイットビーの尼院



あるが、政府が思ひ切つた社會施設をすることに賛成である。」「
てな話を聞かされる、無教育を標榜する人の言としては要領を得て居る。一杯のビールをおこつて呉れたので、返禮の積りで、持ち合はせの日本繪葉書一袋を與へると「好紀念だ、甥

にやれば悦ぶから」と云つて如何にもうれしうな顔をする

(五) 沿岸の風光

テムズ河口にある長い棧橋を過ぎると左岸の地角に小さな町が見える。サウスエンド (Southend on Sea) と云ふ。海水浴場として夏季には倫敦から澤山の人が入り込む。近頃

めつきり女子の風儀が悪くなつたと件のコクニイ先生は云ふ。サウス・エンドからは船が益々陸岸から遠かる。左岸の岩壁を見えかくれに吾々は北上してゐるのである。遙か陸の彼方に

ケドモンの墓



見える町はフレミングトン (Flemington) 町である。勞働會議で吾が滯英中有名であつたスカールボロ (Scarborough) の町は漸く地圖を頼りにそれと判明する。やがてウィットビー (Whitby) の町が斷崖と斷崖との間に赤煉瓦の美しい屋並みを見せる岩壁の上に高く聳えて居るのは有名なウィットビーの尼院である。修繕中と見えて足場が掛つて居る。この尼院は英文學史上では忘れられぬ名所である。紀元七世紀の頃ケドモン (Caddmon) と云ふ無學文盲の一馬丁が夢に詩の靈感を得たと傳へらるゝ處である。當時尼院にては時々宴會が催され、席上客人等は夫々詩や歌を詠じ歌ふ。ケドモンもそ

の席に侍つて何か歌へと所望される。

歌ふ術を知らぬケドモンはそれが辛らさに冥の終らぬうち

に坐を外らす。ある夜のこと、またも坐を外づして、あづかつ

て居る。眠に逃げ歸つて來たが睡魔が襲うてうとうとと睡る。

夢中に天使が現はれ「ケドモンよ歌へ」と云ふ。ケドモンは「哀れむ可きケドモンは歌ふ術を知らぬ」と答へる。それでも試みに歌つて見よ」と天使は強ゆる。ケドモンが翌朝試みに歌つて見ると、歌へぬ筈の歌が歌へる。その話を耳にしてか次の宴會には尼院主のヒルダ(Hilda)は歌をケドモンに所望する。尼僧の命のまゝにケドモンは歌つて見ると立派に歌へた。斯くして歌つたのが今日傳つて居るケドモンの聖歌なるものである。詩はインスピレーションによつて天才の頭腦に生ると論旨を進める人は必ずケドモンの話を例證する。その逸話の尼院こそ今船から遠く眺める高莊な建物である。

海豚の跳躍するを見ては船客は興がる。岩壁近くの海上に鳴の群れ居るを見ては眼鏡の助けを借る。ウイットビーを去つてから船は最早沿岸を辿らない。北極は眞一直線だと誰かが云ひ出す。陸を遠かつた浪の世界に第一夜第二日を送つた北海は荒れるのが常規であると船長は云ふ。海のまんが自分にはいつもよいと見えて、印度洋、地中海、ドーヴァ海峡三者共に平穩無事な航海であつたが、今度の北航も亦平穩至極である。只北海の空がどんより陰暗である。こんなに平穩なことはこの航路としては實に稀有のことであると一乗客は云ふ。

第三日目のスモール・ナンバ(小時間)に船はアバシーンに入港すると船長が云ふ。船長はあから味を帯びた丸顔の人である。船長は「お前はこの航海は怠惰だつたか?」と聞く。「話し、話し、話し、で一日を暮したから怠惰の方で逃げて了つた」と云ふと「それはよかつた」と挨拶をして呉れる。

宵のうちより寢臺に入り、一睡した頃に寢室の戸を叩く者がある。睡たい眼をこすりながら起き上ると一通の手紙を突き出しこれを讀めと云ふ。見ればそれはスキツパの船長である手紙の表には自分の名が認められてある。手紙は三高の同僚エルダ氏の父親からである。手紙の内容によると、船長がエルダ氏の伯父であることが判つた。翌朝まで船で睡て居てもよろしい」と書いてある。船長は「お前の好くやうにせよ然し自働車が待つて居るから、荷支度をして直ぐ行つたらどうか」と親切に云つて呉れる。

「友人が迎へに來て呉れたから、お先に失禮する」と同室の連中に別れの挨拶を云ふ。「何んとお前は幸福な人だ、俺等は明日宿を捜さなければならぬのだ」と握手しながら二人まで大同小異のことを云つた。